

変わりゆくキューバ、変わらぬキューバ

阿部知子（衆議院議員・小児科医）



1. フィデルからラウルへ

私をはじめキューバを訪れたのは 2007 年 1 月、今から七年余り前となる。きっかけは何であったか、今では定かではないが、元々学生運動世代としては「憧れのチェ・ゲバラ」の国であり、ゲバラ亡き後も 1959 年キューバ革命の同志であったカストロ議長に率いられてキューバ危機やソヴィエト崩壊という歴史的な変動を乗り越え、近年はラテンアメリカ諸国やアフリカにまでも医療支援を繰り広げる「ゆるがぬ信念ある国」として興味を持っていた。

永続革命を求めてキューバを後にしたエルネスト・ゲバラがボリビアの山中で殺害されたのが 1967 年。彼はアルゼンチン生まれの医師であり、その彼の遺志を誰よりも知るフィデル・カストロがキューバの建国の途上で貧しい人々の為の医療の普及を目標とし、更にそれを中南米に広げたことは必然であったとも思う。

私の一度目の旅では、そんなカストロとゲバラの関係を大切に思う何人かの友人と共にキューバの保健省をはじめ各地のセンター病院、ポリクリニコ、ファミリードクターの診療現場等を見学した。

併せてソヴィエト崩壊後に食料自給を高める為に各地で取り組まれている農業生産の数々（ミミズ耕法、学校の庭での野菜作り、山間の農業専門学校）に加えて、山間部の小学校での再生可能エネルギーへの取り組みや子ども達のパソコンの使用の様子も見せてもらった。

フィデル・カストロは体調不良と高齢を理由に 2008 年には弟であるラウル・カストロに国家評議会議長の職を譲り、その健康が案じられていたが、最近では再び鋭い論評を再開している様子で、是非とも現代世界が直面するグローバル化経済の進行による格差拡大と世界各地で多発する紛争を押し止めるべく、世界中にキューバの実践の意味を再認識させて欲しいと思う。非核、平和、わけても人々の平和的生存は今や世界が望む希望の姿であるから。

2. 日本・キューバ交流 400 年

そもそも今回のキューバ訪問は、超党派の国会議員からなるキューバ議連の会長古屋圭司議員の提案で、今から 400 年前に遡る支倉常長一行のキューバ寄港に始まる日本とキューバの交流を記念して、再び日本からの訪

問団を送ろうということになった。

実は会長の古屋圭司議員は、フィデル・カストロ前議長との親交が深く、加えて日本の国会議員には保革を越えて政治家フィデル・カストロへの評価が高く、またエルネスト・ゲバラの人気も高いという特別な背景もあったので、とにかく超党派で訪ねるという機運は一挙に高まった。私自身はそれに加えて、これまでもキューバの医療実践に共感し、またゲバラの遺児である小児科医のアレイダ・ゲバラさんとはしばしば意見交換してきたので、今回も医療というルートで個別にあちこちの訪問を企画していた。

予定されたこの訪問団の期日が秋の臨時国会と一部重なってしまった為、結果的には団長として古屋氏と副会長の私のみが参加することになったが、日本にとってキューバは遠くて近い人気の国であることは間違いない。そのことは、今回の訪問は全日空の直行チャーター便で一般参加者も募集したが、仙台育英高校（数年前に支倉常長の銅像をキューバに建立）の生徒さん達 18 人も含めて応募は 200 人を超えてすぐ満席となったことからもうかがえる。

キューバと米国は 1961 年に外交断絶をしており、米国による経済制裁が続けられ、今もアメリカ経由でキューバに渡ることが出来ないため、通常カナダのバンクーバーやトロントや仏のパリを経由して行く。また、今回のように直行便で行っても給油の為の乗り換えも含めて約 16 時間と長旅ではあった。

そんな中、大勢の日本人がキューバを訪れ直接体感してもらうことは日本とは遠い「不思議の国キューバ」にふれる良いチャンスになるし、また何よりも観光とは「Passport to Peace」（平和へのパスポート）であるという言葉が実感されると思う。

3. 代表団としての仕事

代表団の構成は、古屋圭司会長を中心とする議員団（政治、政府関係）と経済界から近藤会長以下日キューバ経済懇話会の一行、そして宮城県からは副知事や支倉常長の出身地の町会議長・議員の皆さん、仙台育英高校関係者、それに交流セレモニーに出演する音楽関係者など多彩であった。

まず政治・経済関係ではラウル・カストロ議長に次ぐ

ディアスカネル国家評議会第一副議長、カプリサス閣僚評議会副議長、更にロドリゲス外務大臣、そしてマルミエルカ外国貿易・外国投資大臣と会見した。また議会側からはマリ人民権力全国議会副議長招待の昼食会での意見交換も行われた。

キューバ革命以降、キューバは今日では世界でたった二つとなった朝鮮民主主義人民共和国と並ぶ社会主義国の一つである。もちろんアメリカとの緊張関係は形を変えて今も続くが、近年オバマ政権の誕生によって関係改善され、キューバ系米国人のキューバ訪問・送金制限は撤廃された。加えて2011年の共産党大会ではラウル議長が正式に第一書記に就任するとともに新たな「経済社会政策方針」が提案されて経済改革が進んでいる。また2013年からは移民法も改正されてキューバ人の海外渡航が自由になった一方で、国内の格差が拡大してきているという。

今回の日本からの経済関係の訪問団もそうしたキューバ経済の市場開放に期待し、今後はマリエル港など一部の経済特区で更に活発に取引が行われることを見込んでいるのだろう。2013年10月段階で進出の日本企業数はわずか14社とのことで、医療やバイオ産業も含めて今後が期待されているとみてよい。

そもそもキューバは外交面においても、アフリカを中心とする非同盟諸国、ラテンアメリカ、カリブへの医療、識字教育サービスを積極的に行っており、その影響力も強い。日本にとってもキューバとの交流がさらに背後に広がるこうした国々との交流へと発展していくことになることを期待している。

4. キューバの医療

日本と比べ経済規模は1/80以下であっても医療における人的国際貢献は数万人と桁違いに多いキューバでは、今回の西アフリカのエボラ出血熱に対しても既に延べ350人の医療者を現地派遣しているという。その医療者の多くがかつてリベリアやギニア、シエラレオネなどで医療実践があり、今回の事態に居ても立っても居られず、自ら派遣を名乗り出る医師が後を絶たないという。現地の人々の生存と生活を守るというキューバの医療者の志が背景にあることと思う。エボラ出血熱への対策は全世界が固唾を飲んで見守っており、各国からの支援金や著名人からの寄付もWHO等の国際機関に寄せられている。一方、自らも感染の危険を伴う現地への人材派遣は極めてハードルが高い。にもかかわらず現地の状況を何とかしたいと行動するキューバの医療者の姿勢は他に較べるべくもないし、実は国内医療における治療姿勢にも共通している。

今回の視察で、私が一行とは別途に訪れたのは伝統医学を専門にするポリクリニコで、脳梗塞の合併症や神経

難病の方々にアロマ、鍼灸、リハビリ等を組み合わせて何とか症状軽快させたいという熱意に支えられており、患者さんへのまなざしも温かかった。

また今一つの視察先は、日本でも患者さんの多い網膜色素変性症の早期発見、早期治療、そして反復継続治療を掲げた国際センターであるカミロ・シエンフエゴス病院であった。日本では網膜色素変性という診断は即「失明」の宣告であり、それまでをいかに延ばし視力を保持するかの発想はない。フィデル・カストロの肝いりで1990年代に始まったこの病院に働く医師達は今も熱心に治療努力を続けている。

治療の原点、医の原点を忘れない医療者が次々と生まれ続ける国キューバの底力を見たように思う。

最後に

今回の日本からの訪問団での今一つの仕事は、我が国からの技術協力として米をはじめとする品種改良に取り組むキューバの穀物研究所へのJICA（国際協力事業団）の器材供与であった。

今回の訪問では前回の訪問時に比べて食料自給の熱気が少しさめているのかなと感じながら、この供与式に参加したが、農業についてはまた次回是非より深く見てみたいと思っている。生命の営みの基本は農業と食料自給にあると思うので。

私の後援会からもたくさんの皆さんが参加して下さったこの旅、皆さん十分満足して下さって、まるで「天国への旅」みたいだったと。お疲れさま、そしてまたどこかに行きたいですね。

2014年10月20日（メールマガジンより転載）



← カプリサス閣僚評議会副議長（右）と握手する古屋圭司衆院議員＝10月3日、ハバナ市



支倉常長像前で和太鼓を演奏する仙台育英高の生徒たち＝10月2日、ハバナ市

← 買い物客らでにぎわう世界遺産ハバナ旧市街＝10月4日、ハバナ市

写真提供：河北新報社・片桐大介記者